

稚貝は現在、屋外流水水槽で中間育成を継続中であるが、9月1日～9日に中間育成を開始した7月2日採卵分では、10月8日の受精後98日目には殻長4mm台の高成長を示す稚貝が出現した。更に最良成長貝では11月24日(145日目)で殻長10mmに達した。12月9日(160日目)と12月16日(167日目)に、殻長5.0～7.0mmの範囲に成長した平均約5.6mmの稚貝15,000個体の年内放流を試験的に実施した。

前年と比較して今年度の種苗生産の高生残率の原因は精密ろ過機使用による幼生飼育水の水質向上もさることながら、生殖巣部湿重量調査で述べたように、種苗生産に使用した親貝の6月、7月の生殖巣部重量比率(GWR)が高値で推移したことも関連性があるように思われる。また中間育成後の高成長は水温が今年の秋から初冬にかけて前年と比較して高いことに起因していると考えられる。

(2) ヒレジャコ

採卵は8月19日に行なった。

親貝は八重山海域から川平保護水面区域へ移殖して1年以上経過した個体を用いた。使用個体数は3個体で大きさは殻長28.5, 28.6, 29.5cmであった。採卵法は切り出し-アンモニア処理法を用いた。GWRは20.3～26.7%と低く、精子は多く採取されたが、卵量は少なかった。発生過程では奇型が多く観察され、媒精24時間後に正常なD型浮游仔貝にまで発生が進んだ個体は約30,000個体であった。D型浮游仔貝の大きさは140μmであった。

幼生飼育はD型浮游仔貝を500ℓ透明ポリカーボネート水槽1槽に収容して、ヒメジャコの場合と同様に行なったが、受精後2日目に幼生の大半が死亡した。また生残した幼生も胃部に餌料による着色が認められないので飼育を中止した。

5. 底質の粒度組成及び底生生物調査

本年度は図6に示す水路部st.1～5の5地点で調査した。

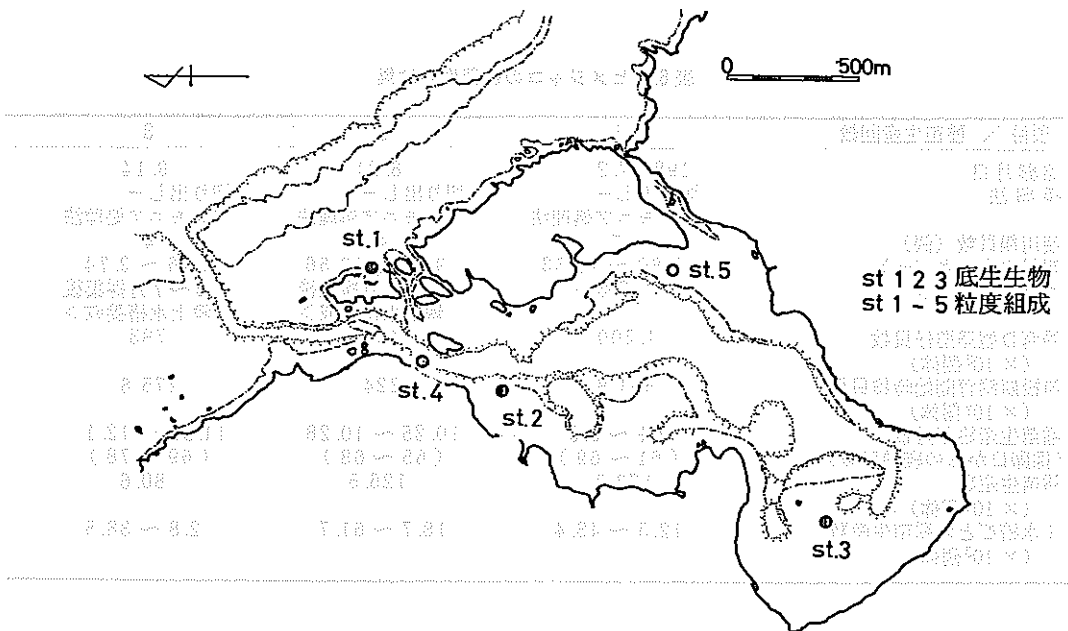


図6 粒度組成及び底生生物調査地点